

【(6) 児童生徒の反応に対する対応】

- ②「児童生徒の関心が低い場合には、発問を変えたり理解を助ける活動を取り入れたりしている」

【(9) 机間指導】

- ②「個に応じた指示や対応をしている」

《つまずきの背景》

- A 刺激の影響の受けやすさ、B 言語理解の困難さ、C 記憶力の弱さ、F 視覚認知の困難さ、I 目と手の協応動作の困難さ、J 言語表現の困難さ、N 注意の持続の困難さ、O 見通しを持つことの困難さ、P 自尊感情の低下、Q 状況理解の困難さ

《解説》

授業中、発問しても子どもがつまらなさそうな顔をしたり、発言が極端に減ったりしてしまうことがあります。その理由として、発問の意味や授業内容の理解が十分でないことや答えを間違えたり失敗したりするのを恐れていることなどが考えられます。

学級の中には、耳から聞くだけでは言葉の意味が十分に理解できない子どもや、聞いたり読んだりした内容を忘れやすい子ども、他のことに注意がそれて発問を聞き逃している子どもなどがいる場合があります。

発問を板書したり、別の言葉で言い換えたりすることや、板書などを活用しながら学習内容を振り返ったり、近くの子も同士で確認し合う活動を取り入れたりすることにより、子どもが発問の意図を理解したり、課題に関心を示したりするようになり、授業への参加意欲が高まることが期待できます。

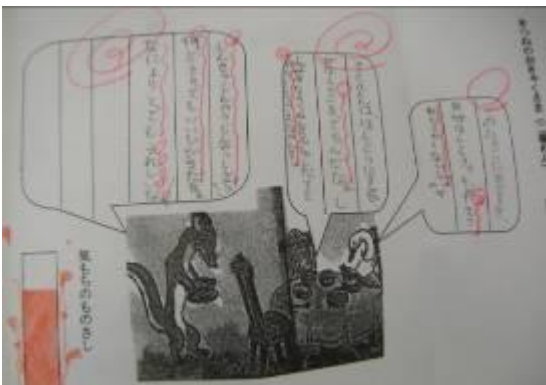
机間指導では子どもの学習状況に応じて個別支援を行うことができます。教材研究の際に、「漢字の字形が整わないことがある」「指示に応じた活動ができにくいことがある」などあらかじめ子どものつまずきを予測し、「なぞり書きができるように、教師が鉛筆で薄く書く」「次にすることを小声で伝える」などつまずきに応じた手立てを考えておくと、限られた時間内での支援をスムーズに行うことができます。また、名簿などに理解度をチェックしておくことで、理解の早い子どもへは発展的な課題を提示したり、理解の遅い子どもにはヒントを与えたりすることができます。

ノートやワークシートに丸を付けたり、肯定的な言葉掛けをしたりすることで、子どもは安心感を持ち、学習意欲が高まります。一方、間違いを指摘されることを極端に嫌がる子どもがいる場合があります。そのようなときには、訂正箇所を指差したり小声で伝えたりするなどの配慮が必要です。また、ノートに何も書いていないような場合には、書き出しの言葉を伝える、なぞって書き込めるように教師が答えを鉛筆で薄く書くなどの対応方法もあります。

【工夫点】

- ・発問への反応が少ない場合には、発問を言い換えたり、補助発問をしたりする。(小中高)
- ・答えにくそうなときはヒントを示す。(小中高)
- ・子どもがなぞれるように、赤鉛筆でヒントや解答の一部を薄く書く。(小)
- ・課題を終えた子どもは合図(帽子、名札ラベルなど)を机の上に出す。(小)
- ・問題が解けている子どもには次の指示を出す。(小中高)
- ・できているところを見付けて褒める。(小中高 工夫例 45)

◆工夫例 45 「できているところを見付けて褒める」



《小学校》

よい意見や感想を書いている場合など、朱書きで肯定的に評価をしています。丸が付いたことで自分の意見や感想を自信を持って発言できる場合もあります。発言できない場合でも、子どもは褒められたことで、自分に自信を持つことができます。